

第39回日本眼薬理学会 ランチョンセミナー4

糖尿病網膜症の克服にむけて

— 基礎から創薬まで —

日時 2019年9月15日(日) 11:45~12:45

会場 名古屋市立大学病院 4F 第1会議室



座長のことば

座長

瓶井 資弘 先生

愛知医科大学 眼科学講座 主任教授

糖尿病網膜症は、長年にわたり眼科医が闘ってきたのにもかかわらず、未だ克服できない難治な病態の一つです。

これまでに、レーザー光凝固、硝子体手術といった外科的治療が登場し、失明はかなり回避できるようになりました。2000年頃までは網膜剥離や硝子体出血が手術適応の大半を占めていましたが、現在は、黄斑浮腫がもう一つの大きな治療ターゲットとなってきています。近年、抗VEGF薬やステロイド剤が登場し、一定の治療効果が上がっていますが、まだまだQOVが十分獲得できているとは言えません。

植村先生は、ペリサイト消失網膜症モデルマウスを開発し、糖尿病網膜症を根底から治すことを目指して研究を積み重ねてこられた、糖尿病網膜症研究の第一人者です。その斬新なアイデアに基づいた新たな創薬の未来を見せてもらい、明日からの研究活動や臨床の希望として頂ければ幸いです。




講演

炎症を基軸とした病態理解と治療戦略

演者

植村 明嘉 先生

名古屋市立大学大学院 医学研究科 網膜血管生物学寄附講座 教授

共催：第39回日本眼薬理学会 /  わかもと製薬株式会社

第39回日本眼薬理学会 ランチョンセミナー4

糖尿病網膜症の克服にむけて

— 基礎から創薬まで —

日時 2019年9月15日(日) 11:45~12:45 会場 名古屋市立大学病院 4F 第1会議室



座長

瓶井 資弘 先生

愛知医科大学 眼科学講座 主任教授

略歴

1988年 大阪大学医学部 卒業・眼科入局

1990年 国立大阪病院眼科 医員

1995年 大阪大学医学部眼科 助手

1996年 米国Cleveland Clinic, Cole眼研究所 留学

2000年 大阪大学医学部眼科 講師

2000年 京都府立医科大学眼科 講師

2002年 大阪大学医学部眼科 講師

2006年 大阪大学医学部眼科 助教授

(2007年より准教授に名称変更)

2011年 大阪大学医学部付属病院 病院教授

2015年 愛知医科大学眼科 教授

現在に至る



講演

炎症を基軸とした病態理解と治療戦略

演者

植村 明嘉 先生

名古屋市立大学大学院 医学研究科 網膜血管生物学寄附講座 教授

略歴

1996年 京都大学医学部 卒業

1996年 京都大学眼科 研修医

1997年 北野病院眼科 研修医

2003年 京都大学大学院医学研究科博士課程 修了

2003年 理研CDB幹細胞研究グループ 研究員

2007年 神戸市立医療センター中央市民病院眼科 副医長

2009年 神戸大学グローバルCOE血管生物学分野 独立型特命助教

2014年 名古屋市立大学大学院医学研究科

網膜血管生物学寄附講座 教授

現在に至る

抗VEGF薬やステロイド剤を用いた薬物療法により、糖尿病黄斑浮腫の治療は一変した。しかし、いずれの薬剤も治療効果に限界があることから、新たな創薬開発が待望されている。現在も複数の新薬について臨床試験が進められているが、個々の患者に応じた最適化治療を進める上では、糖尿病網膜症の病態を細胞・分子レベルで理解することが不可欠となる。糖尿病網膜症では眼内炎症性サイトカインの上昇や、網膜組織内へのマクロファージ浸潤などから、病態生理における炎症の重要性が、以前にも増して認識されている。興味深いことに、網膜血管壁のペリサイトを消失させると、内皮細胞の炎症反応により網膜内に浸潤したマクロファージが、短期間の内に浮腫や線維化などの病態を連続的に進行させることが明らかになってきた。本講演では、ペリサイト消失網膜症モデルマウスを用いた基礎研究データをもとに、糖尿病網膜症の新たな創薬コンセプトを紹介したい。